言語社会研究科　博士審査要旨

論 文 提 出 者　　朴　浩烈
論　文　題　目　　「在日」の言語意識と言語生活
　　――ポストコロニアル・マイノリティの観点から――
論文審査委員　　イ・ヨンスク、糟谷啓介、朴　一

１．　本論文の内容と構成

本論文は、在日コリアン・オールドカマーのうちに存在する朝鮮語コミュニティの実態を調査し、そこにおける言語意識と言語生活を明らかにした研究である。著者は、社会言語学におけるバイリンガリズム研究を参照しつつ、みずから大規模なアンケート調査を実施することによって、これまで注目されてこなかった「在日」の言語意識と言語生活を明らかにすることに成功した。

本論文の構成は次の通りである。

序論　ポストコロニアル・マイノリティという視座
第１章　朝鮮語話者とバイリンガル考
　第１節　朝鮮語話者数について
　第２節　アイデンティティ分類からの話者考察
　第３節　バイリンガルをめぐる議
　第４節　個人的バイリンガルと社会的バイリンガル
第２章　言語意識の構造と表出
　第１節　言語意識の捉え方
　第２節　方法論としての言語意識の「構造と表出」
　第３節　言語意識の構造
　第４節　表出としての言語意識
第３章　社会言語学的考察
　第１節　社会言語学的アプローチ
　第２節　日常使用と非日常使用のことば
　第３節　文法認識と言語評価
　第４節　在日朝鮮語の捉え方
第４章　アンケートと聞き取り調査の結果と分析
　第１節　アンケートと聞き取り調査の対象と概要
　第２節　バイリンガリズム
　第３節　生活と文化
　第４節　在日と民族性
終章　共時態及び通時態から考察する在日アイデンティティ論

あとがき
「図・表」一覧
初出一覧
参考文献

２，本論文の概要

序論では、「ポストコロニアリズム」「アイデンティティ」「マイノリティ」などの概念をとりあげ、本論文全体を支える枠組みが論じられ、日本社会におけるマイノリティとしての在日コリアンの固有性が確認される。

第 1 章では、在日における朝鮮語話者の実態が論じられる。著者は、在日の朝鮮語話者数の正確な数字を出すことはできないが、最大の話者集団は、朝鮮学校学生とその卒業生、さらにそれに連なるひとびとであると推定する。それは朝鮮語を授業言語として用い、第二言語として朝鮮語を習得したひとびとである。章の後半では、社会言語学の観点から「バイリンガリズム」の概念をめぐる議論がなされる。かつてバイリンガリズムは「第二言語でも母語と同等の運用能力をもつこと」と定義されていたが、現在の研究は、バイリンガリズムを単純な言語能力のレベルに還元するのではなく、もっと可変的で動態的なプロセスとみなしている。著者はこのような研究成果にもとづいて、在日コリアンのなかに、日本語と朝鮮語のバイリンガル・コミュニティが存在するとみなしうるとする。

第 2 章では、言語意識の問題がとりあげられる。著者によれば、言語意識をたんなる話し手個人の主観だけに還元することはできない。そこには、自己と他者との関係や相互の認知や承認の問題が関わっており、言語意識を支える歴史的・社会的背景をみなければならない。在日コリアンについていえば､エスニックなアイデンティティの問題とマイノリティとしてのアイデンティティの問題が複雑に絡みあっている状況があり、現段階では、混成による多文化主義や複数アイデンティティによる緩やかなコミュニティ形成に向かう傾向が見られるとされる。

第 3 章では、いわゆる「在日朝鮮語」について論じられる。在日コリアンが話すことばは、朝鮮語の一変種としてとらえるべきであるが､多くの在日の出身地である朝鮮半島南部の地方方言が基礎となって、そこにソウルの標準語、ピョンヤンの文化語、さらには在日コリアンの生活に根ざした固有の要素が重なって、複雑な特徴を示している。さらに、在日コリアンにとって朝鮮語が第二言語であることから来る特徴もある。著者によれば、本国のことばを基準にした規範主義から見ると、在日朝鮮語は逸脱したことばとなってしまうが、やはり在日独自の歴史を担ったことばとして捉えるべきであるとされる。

第 4 章は本論文の中心ともいうべき部分であり、著者の行なったアンケート調査の結果が分析される。アンケートは､「A. バイリンガル能力（朝鮮語と日本語）に関するアンケート」と「B. 生活の文化に関するアンケート」の二種類である。対象は大学生以上の一般成人と中学高校生で、前者と後者では一部異なる質問が用いられている。また、アンケート調査と並行して聞き取り調査も行なわれた。アンケート調査の対象者は 902 名､聞き取り調査は 83 名である。被調査者は、日本で生まれ育ち、日本語を第一言語とする在日 2、3、4 世である。バイリンガル能力に関す

るアンケート調査は、日常会話、スピーチ・会議などのフォーマルな場面、あいさつ、映画やドラマのリスニング等々の 15 の場面で、日本語と朝鮮語のどちらに自信があるかを問うというやり方をとった。このアンケートで明らかになった重要な発見は、すべての場面で日本語が優越しているわけではないということである。日常会話は圧倒的に日本語が優勢であり、とくに若い世代ではその傾向が著しい。ところが、スピーチ・会議などのフォーマルな場面での言語使用となると、むしろ朝鮮語が優勢になる。また、映画・テレビのリスニングで自信のある言語としては、大部分の回答者が日本語を選んだにもかかわらず、衛星放送などで韓国ドラマを見る際には、日本語ではなく朝鮮語で見ると答えた者が大部分であった。「作文・日記・手紙を書く」場合は、日常会話よりも朝鮮語を使用する率が増える。つまり、朝鮮語は「話す」ことばであるよりも「書く」ことばとしての性格をもっている場合がある、等々である。総合して言えば、言語環境、使用場面、使用者の属性に応じて、在日における日本語と朝鮮語のバイリンガリズムはたいへん多様なかたちをとっていることがわかる。日本語が第一言語であるものの、朝鮮語は重要な機能を担っており、いくつかの場面では朝鮮語の使用が優越している場合さえある。若者についても例外ではなく、場面や相手に応じて日本語と朝鮮語を使い分けているという特徴が見られる。これらの点をふまえて著者は、固定的な「母語」の概念を再考する必要があると述べている。

生活や文化の場面では、若者のあいだで「エスニック・リバイバル」ともいうべき現象が見出されるが、その際には、既成の枠組みに従うのではなく、柔軟で複合的な方向をとることが増えている。たとえば、名前や風俗習慣の面でそれが見られる。その一方、朝鮮半島とは異なる「在日」の独自性の意識も現れている。事実、「在日」という集団のルーツは古い過去に遡るのではなく、日本と朝鮮の近代史のなかにあることが自覚されており、この点で、「在日」に関して言えば、ナショナリズム理論で言われる原初主義と近代主義の対立が完全にはあてはまらないとされる。

終章では、「在日」という集団が既存の国家や民族の枠組みにあてはまらない存在であることが確認される。そして著者は、朝鮮学校での教育は、マイノリティ集団の言語継承という点で、カナダのイマージョン教育にも勝るとも劣らない成果を挙げてきたことがもっと評価されるべきであると主張する。継承語やバイリンガル教育の問題は、現在の日本社会のなかで、たとえばブラジル人移民の母語教育が直面しているものであり、その点からも、「在日」の問題はそれだけに限定されるのではなく、他のマイノリティにも通じる一般性をもつことが述べられる。

３．本論文の成果と問題点

本論文の成果は以下の点にある。

第一に、政治的な文脈で語られることの多かった「在日」を、言語コミュニティという観点から捉えることで、「在日」の新たな側面に光を当てたことである。とりわけ、アンケート調査を通して、日本語と朝鮮語のバイリンガル集団の存在を確認した意味はきわめて大きい。これまで「在日」の言語生活に関しては、さまざまな言説が流布してきた。ひとつは、在日の第一言語は日本語であり、日本語への言語的同化が完了したというものである。これに対して著者は、社会言語学の研究成果をふまえて、第一言語が日本語でありながらも、朝鮮学校周辺コミュニティに

おいては、日本語と朝鮮語が安定したかたちで社会的に共存していること、さらにその場合の朝鮮語は、なんらかのイデオロギー的機能をもつよりは、生活に密着したかたちで自然に用いられていることを明らかにした。このような成果が可能になったのは、バイリンガリズムを固定した状態ではなく複合的なプロセスとしてとらえる著者の優れた理解があったからである。

第二に、綿密なアンケート調査をおこない、その結果をきわめて緻密に分析したという方法論の堅実さである。「在日」の言語生活と言語意識に関して、これだけ大規模で内容豊かなアンケートが行なわれたのは初めてといってよく、その点だけでも本論文の価値を高く評価できる。もちろん、本論文で行なわれたのは、主観的評価や態度に関するものではあるが、著者はていねいな聞き取り調査を通じて、調査結果の客観性を具体的に検証する作業を行なっており、言語生活の実態がある程度正確に反映されたものとみなすことができる。とりわけ、朝鮮半島本国の朝鮮語・韓国語ではない、「在日」固有の朝鮮語とそれに対する「在日」自身の意識の問題を取り上げた意義は大きい。

しかし、本論文にも以下のような問題点が見られる。

まず、「在日」という集団を言語という側面から見ることで多くの成果が挙げられたにはちがいないが、その反面で限界も見られる。それは「在日」のなかの非朝鮮語話者との関係があまり論じられていない点である。この点では、論文の題名と内容にいくらか齟齬があるようにも感じられる。むしろ、朝鮮学校コミュニティに焦点を当てたことを明示的に言い表した方がよかったのではないかと思われる。また、朝鮮学校のあり方自体にも歴史的な変化があるので、その点も考慮に入れれば、さらに論述が豊かになったであろう。さらに付け加えれば、言語以外のアイデンティティ指標と言語との相関関係をさらに検討する余地が残されている点や、論述が整十分に整理されていない箇所が若干見られることが残念である。また、在日以外の集団との比較、たとえば日本の華僑／華人における言語継承のあり方との対比なども、試みてもよかったかもしれない。

しかしこれらの点は著者も自覚しているところであり、本論文の価値がそれによって下がるものではない。在日の言語意識という新しいテーマに取り組み、アンケート調査をふまえて堅実な成果を挙げた著者の努力と力量は、いくら評価してもしすぎることはない。在日研究に新生面を切り開いた論文として高く評価するものである。

４．結論

以上のことから、本論文が学位論文に値するすぐれた研究であると認められ、著者に一橋大学博士（学術）の学位を授与することが適当であると考える。

最終試験結果要旨

２０１０年6月９日

受験者　　朴浩烈
最終試験委員　イ・ヨンスク　糟谷啓介　朴　一

平成 22 年 6 月 4 日、学位請求論文提出者 朴浩烈 氏の論文「「在日」の言語意識と言語生活――ポストコロニアル･マイノリティの観点から――」に関する疑問点について逐一説明を求め、あわせて関連分野についても説明を求めたのに対し、朴浩烈 氏はいずれも十分かつ適切な説明を与えた。

よって、朴浩烈 氏が学位を授与されるに必要な研究業績および学力を有することを認定し、最終試験での合格を判定した。